

事例整理

自校の定期考査の 現状と課題についての 整理が議論の第一歩

定期考査の廃止は「手段」に過ぎない

事例では、定期考査の廃止決定に至るまでの経緯と、廃止決定後の改革を紹介した。廃止の理由や、その決断を支えた教師の思い・考えは様々であったが、すべての事例に共通していたのは、定期考査の廃止は観点別学習状況の評価を充実させ、目標と指導と評価の一体化を図るための「手段」に過ぎないとしていた点だ。各校が目指したのは、生徒が自身の学習に見通しを持ち、主体的に取り組み続けることができる学校づくり、そして教師が授業改善を続けながら、学校として育成を目指す資質・能力を、各教科・単元を通して着実に育む学校づくりだった。

単元テストだ。事例では、単元テストの実施によって、生徒にどのような力を身につけさせたいのか、そのためにはどのような授業と評価を行うのかが議論され、見通しを持って各単元の授業を開始するようになったことや、単元ごとの評価を行うことで評価方法の引き出しが増え、それまでは見逃していた生徒の資質・能力を発見することができるようになったことなどが、現場の教師から語られた。

しかし、定期考査の廃止が目的ではない限り、定期考査そのものを改善することで、目標と指導と評価の一体化を図る選択肢もあるだろう。定期考査の問題の質や評価への生かし方を見直し、生徒が自身の学習状況を把握できるようにすることは、定期考査の存続・廃止の議論を待たずして取り組むべきことではないだろうか。定期考査は必要か、その答えは、各校における学校づくりの議論の先にある。

図 定期考査で生じやすい問題と、その解決の糸口

	定期考査の特徴	生じやすい問題	解決の糸口
評価の目的	総括的評価	定期考査の成績で評定が左右される	評定における定期考査の成績が占めるウェートを見直す
評価する資質・能力	主に知識・技能、思考力・判断力・表現力	ペーパーテストによる評価のため、知識・技能中心の評価となりやすい	定期考査以外の多様な評価方法を取り入れる
実施体制	全校または学年で一斉に実施	日々の学習の積み重ねではなく、一夜漬けの学習で臨む生徒が生まれやすい	単元テストなど、教科・科目ごとに高い頻度でテストを行うことで、日々の学習の積み重ねを促す
実施期間	3日～5日間程度 (実施前の一定期間は部活動などは停止)	授業だけでなく、部活動や探究学習などの校外学習、資格・検定試験対策が中断される	全校または学年で一斉に実施しないようにすることで、テスト期間を設けない
実施回数	年3～5回	考査間の空きが長く、生徒の学習上の問題点を発見しにくい。1回の考査の結果が評定を大きく左右し、成績の挽回が難しい	単元テストなど、高い頻度でテストを行うことで、学習上の問題点を見つけるとともに、その後のテストで挽回しやすくする
出題内容	授業で学習した内容 (複数の単元にまたがることも)	出題範囲が広いいため、生徒は復習し切れなかったり、受けっ放しになったりすることがある。単元の途中までが出題範囲となることがあり、単元ごとの評価が実現しづらいことも	単元テストやパフォーマンス課題などで、単元・題材等のまとまりごとに評価する
評価結果の利用方法 (生徒)	今後の学習改善	出題範囲が広いいため、生徒が自身の学習上の問題点を把握しづらく、学習改善に生かしくにくい	単元の指導計画やルーブリックを通じて学習目標を共有し、単元テストのようなスモールステップの評価を行うことで、生徒自身の学習状況の把握と学習改善を支援する
評価結果の利用方法 (教師)	今後の授業・指導改善	定期考査の結果が評定や校内順位を決めるためのものにとどまり、授業・指導改善の材料として生かされないことも	単元ごとの指導計画やルーブリックを作成し、授業とテストの目的をすり合わせ、テストの結果を授業・指導改善につなげる

※事例の内容も踏まえて編集部で作成。